

第20回日本臨床毛髪学会 学術集会

Aderans Science Symposium

◆ 日時: 2015年12月5日(土) 10:45~11:45

◆ 会場: 高知市総合あんしんセンター

座長

別府ガーデンヒルクリニック くらた医院 院長
日本臨床毛髪学会 常任理事、日本臨床皮膚外科学会 理事

倉田 莊太郎 先生

講演

抗がん剤治療を受ける患者のwellbeingを目指した
スカルプケアサイエンスの試み

東京大学大学院 医学系研究科
健康科学・看護学専攻 老年看護学/創傷看護学分野 助教

玉井 奈緒 先生

講演

毛髪ケアのルネッサンス:
ADSセファランチン®のエビデンス

大阪大学大学院 医学系研究科
皮膚・毛髪再生医学寄附講座 准教授

乾 重樹 先生



講演

東京大学大学院 医学系研究科 健康科学・看護学専攻
老年看護学/創傷看護学分野 助教

玉井 奈緒 先生

抗がん剤治療を受ける患者のwellbeingを目指したスカルプケアサイエンスの試み

我々の教室では脱毛と毛髪再生のメカニズムを解明して治療することで、脱毛による患者の負担を軽減し、より健やかな日々を支えることを目標に、毛髪の健康を考える「スカルプケアサイエンス」に取り組んできた。その取り組みの中でも核となっているのが、抗がん剤治療に伴う脱毛に関する研究である。我々は女性のがんの中でも最も罹患者数が多く、脱毛が生じる可能性の高い抗がん剤を標準治療として使用している乳癌に焦点を当て、治療中の頭皮の症状や生理機能、QOLの変化に関する調査を行っている。特に頭皮生理機能の変化を明らかにすることで、治療中から治療後の具体的なスカルプケアを確立し、脱毛中の症状の緩和と健やかな再発毛の促進を目指している。

近年抗がん剤による副作用予防のための治療は進歩してきており、吐き気などの消化器症状や白血球減少については症状コントロールが可能となってきた。しかし乳癌患者にとって最も苦痛が大きい副作用である「脱毛」に関しては、エビデンスのある予防方法は確立されていない。そのため使用する薬によっては80~90%の確率で脱毛が生じる。女性において髪の毛は、ボディイメージや女性らしさを形成し、社会で生活する上で非常に重要なものであるため、脱毛により患者のセルフエスティームは著しく低下する。さらに脱毛開始時には多くの患者が頭皮のピリピリ・チク

チクとした痛みや痒みなどの不快感を強く訴えたとともに、脱毛後にも頭皮の痒みや乾燥などの症状が継続する場合もある。このように抗がん剤によって頭皮は何らかの影響を受けて変化し、外界からの刺激にも弱くなっている可能性がある。しかしそのような状態でも、患者は仕事や日常生活を営む上でウィッグなどのケア用品を着用しなければならない。患者が治療に専念でき、安心してケア用品が着用でき、早期の再発毛に向けて健やかな日常生活を営めるように、まずは治療中の脱毛頭皮がどのように変化しているのか、その実態を把握する必要がある。実態を明らかにすることで、頭皮症状の予防や治療方法、頭皮に優しいケア用品の具体的な検討が可能となる。中でもウィッグは見た目の変化を最小限にし、患者のセルフエスティームを保持するため、脱毛中の患者にとっては欠くことのできないケアアイテムである。そのため安心・安全な医療用ウィッグの検討は重要である。

今回はこれらの実態調査の結果と今年4月に経済産業省より制定された「医療用ウィッグに関する日本工業規格(JIS規格)」を踏まえて、患者のwellbeingを目指したスカルプケア、医療用ウィッグに求められる条件とは何かについてお話しする。

略歴

平成13年3月 金沢大学医学部保健学科卒業
平成15年3月 金沢大学大学院医学系研究科保健学専攻
看護学領域 修了(保健学修士)
平成15年4月 聖路加国際病院 外科病棟勤務
平成21年4月 東京大学大学院医学系研究科健康科学・
看護学専攻 入学

平成24年3月 東京大学大学院医学系研究科健康科学・
看護学専攻 修了(保健学博士)
平成24年4月 東京大学大学院医学系研究科ライフサポート
技術開発学(モルテン) 寄付講座 特任助教
平成24年12月 東京大学大学院医学系研究科健康科学・
看護学専攻 老年看護学分野 助教 現在に至る



講演

大阪大学大学院医学系研究科
皮膚・毛髪再生医学寄附講座 准教授

乾 重樹 先生

◆ 毛髪ケアのルネッサンス: ADSセファランチン®のエビデンス

セファランチンはツツラフジ科植物タマサキツツラフジから抽出したアルカロイドである。タマサキツツラフジは中国や台湾で自生し、民間薬として使われていた。1914年に早田文蔵がStephania cepharantha Hayataという学名で報告し、さらに1934年に近藤平三郎がその有効成分を精製し、学名にちなんでセファランチンと命名した。当初、結核やハンセン氏病治療薬として使われたが、その後生体膜安定化作用、抗アレルギー作用、免疫調整作用などが明らかとなり、臨床実地においては放射線による白血球減少症、円形脱毛症、黚糠性脱毛症、滲出性中耳炎、マムシ咬傷を適応症とする内服薬として使用されてきた。脱毛症について「円形脱毛症診療ガイドライン2010」で内服薬がC1(行うことを考慮してよい)と推奨されているが、セファランチンの外用については「男性型脱毛症診療ガイドライン(2010年版)」においてまだエビデンスがないということから、C2(根拠がないので勧められない)と評価された。発売されていたセファランチン外用ローション薬用クロウ®(化研生薬)は製造中止となり、セファランチン外用療法はされなくなっ

た。しかしながら、臨床諸家よりその有効性がしばしば観察されるとの声もある。我々はセファランチンのリポ化製剤であるADSセファランチンを用いて、その毛成長への効果について基礎的および臨床的検討を加えた。まず培養男性型脱毛症毛乳頭細胞に0.1および1.0 $\mu\text{g}/\text{mL}$ のセファランチンを添加したところ、IGF-I mRNA発現量が増加した。セファランチン10mgを内服した場合、成人では血中濃度は1ng/mLと上記添加濃度と比べ著しく低値である。したがって、より高い局所濃度が期待できる外用がIGF-I誘導による毛成長促進効果が期待できる。そこで行った男性型脱毛症の成人男性22名のADSセファランチンローション6ヶ月外用臨床試験では、毛髪数および毛直径を増加させる傾向($p < 0.1$)があり、毛成長速度を有意に増加させた($p < 0.01$)。以上より、ADSセファランチンが男性型脱毛症に対する新しい毛髪ケア成分となることが示唆された。

セファランチンという歴史の古い薬の新しいエビデンスが、一度衰退した毛髪ケアの復古(ルネッサンス)を導くものと期待される。

略 歴

1991年 大阪大学医学部医学科卒業、医師免許取得
1991年 大阪大学医学部皮膚科学教室入局
1992年 大阪労災病院皮膚科医員
1996-8年 米留学(ウイスコンシン大学、ロチェスター大学)
この間、1997年 大阪大学大学院博士課程修了、学位取得
1999年 大阪大学医学部皮膚科学教室医員
2000年 大阪大学医学部皮膚科学教室助手
2006年- 大阪大学医学部皮膚・毛髪再生医学寄附講座准教授
(附属病院皮膚科兼任)

[専門医資格]

日本皮膚科学会専門医、日本アレルギー学会専門医・指導医、
日本褥瘡学会認定師(医師)、日本抗加齢医学会専門医、日本
がん治療認定医機構暫定教育医

[学会役職など]

毛髪科学研究会世話人、日本臨床毛髪学会理事、日本研究
皮膚科学会評議員、日本アレルギー学会代議員(専門医制度
試験問題作成委員)、日本抗加齢医学会評議員、日本皮膚ア
レルギー・接触皮膚炎学会評議員(広報委員)、日本美容皮
膚科学会評議員(雑誌編集委員)、日本褥瘡学会評議員

[受賞]

第72回日本皮膚科学会東部支部総会 会長賞,2008,平成22
年度日本皮膚科学会雑誌論文賞(The Journal of
Dermatology), 2010, F1000Prime AFM Travel Grant
2013, JD Award, Most Downloaded Articles in 2013,第14
回日本抗加齢医学会総会プレナリー賞, 2014, 第33回日本
美容皮膚科学会優秀演題賞,2015. 他